

# ジュニアスポーツ教育学科の設立・現在・未来

但 尾 哲 哉

## I 学科の設立

2008（平成20）年ジュニアスポーツ教育学科は、児童教育学科の生涯体育・スポーツコースを発展させてつくる学科として文部科学省より「届出」により設置可能として認められ誕生した。

設置の背景としては、当時より「子どもの体力低下問題」が取りざたされ、その原因として「子どもの運動離れ」「子どもの運動嫌い」が挙げられていた。この状況が続けば、大人になっても運動を行わない、すなわち生涯スポーツ志向が欠落し、運動不足の大人が多くなる世の中に危機感を持った。このような大きな社会的背景に対応する体育教員、スポーツ指導員を養成するために、コースから新学科へと発展させた。教員組織の編成においては、研究面で十分な業績を有する者にとどまらず、スポーツ経験やスポーツ指導において高い実績を有する教員によって学科のスタッフ、カリキュラムを編成した。

ジュニアスポーツ教育学科の開設当初は、「運動嫌いな子どもをつくらない」をモットーに、「どんな体育の授業を展開すればよいのか」「どんなスポーツ指導をすればよいのか」を子どものスポーツ教育の視点から、スポーツ教育学、保健体育学、スポーツ心理学、スポーツ社会学、運動生理学、などから幅広く学んできた。この考え方は今も継続され、本学の学びの特徴である、オンキャンパス、オフキャンパスで実践されている。座学において子どもの視点から多くの専門科目を学修し、その内容を基礎として学生自身で指導内容、指導方法を作成しオフキャンパスの場面で実践し

ている。さらに、最近ではオフキャンパスを研究活動の場としての取り組みも行っている。

## II 現在・未来

昨今、子どもをめぐる問題が多く報告されている。いじめ、自殺、不登校、ひきこもりなどである。このような問題が低年齢化しているのも特徴であろう。原因を特定するのは難しいが、高度情報化時代に子どもを取り巻く環境が大きく変わり、ネットやポータブルゲームに多くの時間を費やし、心身のバランスが取れないままに成長することも、一因としてあげられる。子どもが健やかに育つ環境には、他者といかに触れ合うか、いかに適度な運動をおこなうか、そして、栄養バランスの良い食事、十分な休養が求められる。

一方、子どものスポーツへの取り組みにも変化がうかがえる。低年齢期からオリンピック選手、プロ選手を目指し専門的な指導を受けている子どもが増えてきている。結果、現在のトップアスリートも低年齢選手が増えている。しかし、このような専門的指導を行う場所においても様々な問題が指摘されている。体罰における指導、パワーハラスメント、セクシャルハラスメントなどだ。これらにより子どもを含む多くの選手たちが、傷つき、スポーツから離れていったケースも少なくない。

今、ジュニアスポーツ教育学科では、スポーツが文化として存在すべきことを多く社会にメッセージとして送っている。スポーツ活動は心と体の成長に影響を与え、健康の保持増進、体力の向

上はもとより、社会に明るさと活力を与えるべき文化である。

これらのことから、子どものみならず、大人も含めスポーツを行う環境を見直す取り組みを始めている。まずは、大学の取り組みとして、学内のスポーツ活動を支援する「スポーツセンター」を設置した。

センターでは、学生の学業とスポーツ活動の両立支援や学生が安全・安心の中でスポーツ活動ができるように環境整備・改善を行ったり、キャリア支援などを行うことを目的としている。初めての取り組みであり、今後多くの課題が出てくると考えている。しかし、この課題こそが、ジュニアスポーツ教育学科の学生と教員にとっての学びとなりスポーツセンターと共に解決に努力を尽くし、この課題解決の過程と成果が、スポーツが文化として自立した、未来の日本のスポーツ運営のあり方を探るヒントとなるであろう。

その時に社会へ新しいメッセージとして発信できるように努力していく所在である。

### III おわりに

ジュニアスポーツ教育学科は、皆様のご指導、ご協力のお陰で、漸く10年を迎えました。

学科の運営にあたふたした時期から、今は地域貢献ができるようになりました。

今後は、神戸親和女子大学スポーツセンター、NPO 法人親和スポーツネット、また学外のスポーツ協会、スポーツ団体、産業界とも連携を図りながら、さらにウイングを広げて参ります。

これからも、ジュニアスポーツ教育学科をよろしくお願い申し上げます。